

酪農学園大学

出会い

No. **68** 2013. 4. 4

キリスト教教育委員会



酪農学園大学正門（東門）：「狭き門」と呼ばれている

「三愛精神」のドラマ

宗教主任 藤井 創

何事にも自分から働きかけよう—実り多い学生時代を過ごすために—
農食環境学群 土壌作物栄養学研究室 松中 照夫

「イエスとの出会い、酪農学園との出会い」

獣医学類・獣医疫学ユニット 蒔田 浩平

「三愛精神」のドラマ

宗教主任 藤井 創

第一部 土を愛する人たちの出会い

一昨年5月、わたしは被災地ボランティアチーム第5班の学生たちと大船渡市に行きました。現地に着いた翌日、わたしたちは日本キリスト教団大船渡教会の礼拝に出席しました。礼拝の後、ある方がわたしたちに挨拶したいと話し始められました。その挨拶は、酪農学園大学に対する感謝のことばで溢れていました。最後は、感極まり、声を詰まらせてしまわれました。

その方は、大船渡の隣町、陸前高田市の和牛の繁殖農家、小澤惣一さんでした。小澤さんの家族は無事でしたが、自宅は津波で流され、牧草地も跡形もなくなっていました。高台にあった牛舎は助かったものの、牧草が底をつきかけ、絶望的な状況でした。

そんな時、本学から被災地ボランティアの「先発調査隊」が大船渡に派遣されました。大船渡教会に宿泊しながら、支援活動に当たる中、陸前高田市にも足を伸ばし、学生たちは、そこで

小澤さんと出会ったのです。

第二部 苦難の人に寄り添う愛の働き

調査隊のひとり、(当時)本学大学院生の関口明希さんは、小澤さんの苦境に接し、なにかできないかと思案しました。本学に戻った後も小澤さんと連絡を取り、「牧草が不足している」ことなどを本学関係者に伝えました。これを受け、本学教員の尽力もあり、本学と協力関係にある浜中町農協に支援を打診。浜中町の酪農家の方が牧草ロールを提供してくれることになりました。運送費は浜中農協が負担し、5月28日、その牧草が小澤さんのもとに届けられました。その翌日29日に、わたしたちは大船渡教会の礼拝に出席し、小澤さんの挨拶を聞いたのです。

わたしたちも、小澤さんのところを訪ね、牛舎の掃除をし、電気もない中で、昼食をごちそうになりました。第4班も、力の余った男子学生たちが小澤さんの被災したご自宅の片付けで大活躍していました。学生たちは、まさに



小澤さんご夫婦と牧草ロールの前で
(右から二人目が筆者)

顔と顔を合わせて、小澤さんご一家とおつきあいさせていただいたのです。

第三部 神を愛し、前向きに生きる！

小澤さんは、大震災からちょうど一年後、昨年3月11日、大船渡教会で洗礼を受けて、キリスト者となりました。現在も牧草場が使えず、牧草をアメリカから輸入するなど、厳しい状況が続いていますが、小澤さんが試練や思い煩いをすべて神に委ねて、感謝に溢れて、懸命に生き働いておられる姿が目に見えるようです。

酪農学園大学の「建学の精神」は、神を愛し、人を愛し、土を愛する「三愛精神」です。被災地で学生と小澤さん——土を愛する者同士——が出会い、その苦難を見過ごしにできないで

寄り添い続けた学生や教職員に、「土を愛する人たちが」共鳴し、善意の輪が拡がり、その愛の働きに勇気づけられた小澤さんが、神を愛し、困難の中をも感謝にあふれて懸命に歩んでおられる——被災地と本学の間に「三愛精神」の壮大なドラマが生まれたのです。

共に泣き、共に喜ぶ

牧師パウロは「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12章9-15節）と勧めています。「泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜ぶ」、これに優る人生の幸いはないからです。本学の学生たちは、被災地での小澤さんとの出会いにおいて、まさに、その幸いを与えられたのです。

関口さんは、この経験を通して「酪農学園大学の底力がわかりました。自分がこの大学に入ったことを誇りに思います」と言っています。三愛精神が酪農学園大学の底力です。

全国各地から入学されたみなさんも、この酪農学園に連なる幸いを思い、本学で学ぶことを誇りとしながら、共に、この酪農学園のスピリットに生かされていきましょう。

何事にも自分から働きかけよう

—実り多い学生時代を過ごすために—

農食環境学群 土壌作物栄養学研究室 松中 照夫



酪農学園大学に入
学された皆さんを心
から歓迎し、この一
文を皆さんに贈りたい。それは皆さんに
この学舎で実り多い

学生生活を送って欲しい、ただその一
念からである。私がここで訴えたいこ
とは「誰かからの働きかけをただ待つ
のではなく、自らが積極的に働きかけ
る」ことを心がけて欲しいということ
である。

■建学の精神＝三愛主義

酪農学園の創立者黒澤西蔵は「三愛
主義をもって建学の精神」とした。三
愛主義とは「神を愛し、人を愛し、土
を愛する」ことである。同時に、「健
土健民」というもう一つの建学の精
神も耳にするだろう。この三愛主義の
うち、ここでは人を愛するというこ
を考えた。

ここでいう「人を愛する」こととは、
いわゆる恋愛感情ではない。黒澤によ
れば、自分がして欲しいと思うこと、
それを自分の隣にいる人にするこ
と、それが隣人愛であり、三愛主義で
いう人を愛するということである。

■善きサマリア人の話

この隣人愛について、イエスはたと

え話をしている。それが以下に述べる
善きサマリア人の話である。

あるユダヤ人がエルサレムからエリ
コに行く途中、強盗に襲われた。強盗
はその人の服を奪い、殴りつけ、半殺
しの状態にして逃げ去った。道ばたに
倒れていたその人のことを目にしたに
もかかわらず、祭司やレビ人（彼らは
宗教上の礼拝や儀式を司り、またそれ
らが執行される神殿と深いかわりをも
つ人達である）は知らぬ顔して通り
過ぎていった。しかし、そこを通りか
かったサマリア人（彼らはユダヤ人か
ら宗教上の理由で極端に嫌われ、迫害
されていた）は、この半殺し状態のユ
ダヤ人を見捨てなかった。傷を治療し、
自分のロバに乗せて宿屋まで運び、宿



善きサマリア人（レンブラント作（1630）、ウィ
キペディアより）

屋の主人にその人の世話を頼み、費用の全てを出して行ったのである。

■誰が隣人となったのか

この話で、いったい誰がこのユダヤ人の隣人となったのかとイエスは問う。もちろん、それはサマリア人である。イエスは、このサマリア人と同じように隣人を愛しなさいと語り、その実践をせまっている。

私たちの日常にも思い当たることが多くあるだろう。2011年3月11日、大震災が東北地方を襲った。多くの人達が被災した。被災によって住み慣れた故郷も自分の家や暮らしも、その全てが奪われてしまった人達がこの日本にいる。見て見ぬふりをせず、そばに行き何か力になれないかと誰しものと思う。その被災者のことを自分のことのように感じた本学の学生さん達は、今もなお、ボランティア活動を通じて津波や原発事故の被災者の隣人になろうとしている。

■無関心—愛することの反対の言葉

マザー・テレサ（助けを必要とする人達への支援活動でノーベル平和賞受賞）は、愛するという言葉の反対語は無関心—かかわりを持たないということだという。「この世の最大の不幸は貧しさや病ではない。誰からも自分は必要とされていないと感じることだ」との彼女の言葉は、無関心の対象となった人のうめき声であると思う。昨今の学校での「いじめ」で最もつらい「いじめ」は、暴力的なことよりもむしろ、級友から無視され、存在さえ

否定されてしまうことだろう。

では、どうすれば先ほどのサマリア人や、ボランティア活動に打ち込む人、またマザー・テレサのような人間になれるのか。

■自分から働きかける

その答え、それがこの一文で皆さんに訴えたかったこと、すなわち、「誰かからの働きかけをただ待つのではなく、自らが積極的に働きかける」ことを実践して欲しいということである。

受け身、指示待ち、そういう生き方は楽である。何も考えなくてよいからだ。しかし、それでは豊かな学生生活を送れないだろう。学問を学ぶ時も、対人関係やサークル活動でも、何事にも積極的に自ら働きかけることをいとわなければ、この大自然の中での生活がきっと実り豊かになるだろう。「自分のして欲しいように隣人にする」。これが人を愛することであり、積極生活の第一歩だと私は信じている。



マザー・テレサ（1910—1997）
（ウィキペディアより）

「イエスとの出会い、酪農学園との出会い」

獣医学類・獣疫医学ユニット 蒔田 浩平

はじめに新入生の皆様、酪農学園大学へのご入学、おめでとうございます！この時期、皆様には同級生、先輩そして教職員との「出会い」がたくさんありますね。私からは、私に起きた、イエスとの出会い、酪農学園との出会いについてご紹介します。



ネパール・エベレストで

イエスとの出会いについて

若いころ私の原動力になっていたものは利己的な「夢」でした。そして夢に破れて目標を見失っていた1998年に埼玉県庁職員の身分で応募した青年海外協力隊が、私の人生を180度変え

ました。私が配属されたのは、標高1900mの山中にあるジリ職業訓練学校でした。活動開始後一年ほど経った頃、ジリから60kmほど離れた山深い村に学生15名ほどを送り込み、3週間農業技術を通して村に奉仕するプログラムがあり、私も一週間泊まり込みで同行しました。私たちが泊まった休業中の学校には電気もトイレもなく、飲み水は山水、食事は薪で火を焚き作りました。

滞在最終日のことです。お産後一日以上胎盤が出て来ない牛の胎盤停滞に遭遇しましたが、日本では家畜感染症のまん延防止の指導をしていた私には正しい治療方法を思い出せず、直腸から固くなった子宮をマッサージして診療を終えました。そこから山を一時間下り、また一時間登り、停めてあったバイクで3時間ほど掛けてジリに戻りました。簡単に思われるかも知れませんが、足は山ビルにたくさん血を吸われ、バイクで転落したら一たまりもない崖の道を走り、途中水牛に全力で追いかける命がけの移動です。家に着きまず教科書を開くと、正しい処置法が書かれていました。夜、体は疲労し切っているのに、適切な処置が出来なかったことが気になり、戻るべき

かどうか悩み眠れませんでした。

早朝、結局あまり眠れないまま薬品等を補充し、バイクで村へ戻りました。山中霧深く、バイクで転倒事故も起こしましたが、歪んだ車体で走り続け、山を下り、また山を登り、大変な思いをして村に着きました。帰ったはずの私を見て農家さんはとても驚いていました。牛のことを聞くと、無事胎盤が出たとのこと。それを聞いた時、自然に「良かったね！」という言葉が私の口から出て来ました。結局自分には何も出来なかったのですが、なんとも言えない清々しい気分でした。この時、人に尽くす生き方をしたいと強く感じました。

帰国して4年後、世界の貧困削減を志し退職、2年間の奨学金を得て2004年に一歳の長男と妻と共にスコットランドのエディンバラ大学に留学したのですが、語学の壁、世界中の優秀な学生達との競争、自らの貧困・弱さ、将来の不安で苛立ち、「人のために尽くす」などと真面目に考えた自分が何と馬鹿だったかと後悔しました。そこで救われたのが教会でした。私達は、スコットランドのクリスチャンに囲まれ、愛を知るとともに、逃れられない自分の様々な罪を許してくださるイエスの存在を知りました。研究地ウガンダのクリスチャン達も愛を持って単身赴任の私を支えてくれました。「あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、任命したのです」(ヨハネの福音書15

章16節)。利己的な私が青年海外協力隊を経て辛い留学をしたのも、イエスの導きであることを知り、私はイエスと個人的に向き合い、受け入れ、心に平安を得ました。



スコットランドのエディンバラ教会で
(教会メンバーの誕生日パーティ)

酪農学園との出会いについて

2008年11月、エディンバラから日本に帰国する間もなくケニアの国際家畜研究所に赴任しておよそ一年経った時のことです。妻の重い病気が発覚し、急遽治療のため日本に帰国した矢先のこと、酪農学園大学で私の専門分野である獣医疫学のポストが公募され、2010年4月に本学に赴任しました。

酪農学園大学と言えば、協力隊仲間には揃いも揃って生命力・人間力が強く、逞しいイメージがありました。公募内容を見て酪農学園がキリスト教主義を掲げていることを初めて知り、改めてその生命力の強さに納得をしました。酪農学園大学は2010年宮崎県口蹄疫の癒しへの取り組みや、2011年東日本大震災におけるボランティア活動お

よび放射能で困っている地域への支援を行っています。その強さ・優しさはどこから来ると思いますか？その答えを考えながら、学業に励み、礼拝にも

参加していただきたいと思います。皆さんの学生生活が、たくさんの恵みを受け、豊かなものとなりますようお願いいたします。

大学礼拝への案内

本学はキリスト教精神に基盤を置く大学として創立以来60年間大学礼拝を大切にしてきました。それは知性や理性に基礎づけられた学問や科学を営む「人間そのもの」を根底で支え、導く存在に目をとめてほしいと願ってきたからです。大学礼拝は毎週火曜日午前10時40分から黒澤記念講堂で守られます。

大学礼拝は聖書の言葉を聞き、共に祈り、共に讃美することを通して大学共同体の構成員である学生・教職員が一体になる時間にもなるのです。ぜひ、積極的に参加して下さい。



昨年12月18日(火)大学礼拝
＜クリスマス・コンサート＞

あ と が き

新入生のみなさん！入学おめでとうございます。皆さんは入試と言う狭き門を通過し酪農学園大学に入学しました。「出会い」第68号の表紙になっている写真は大学の正門です。この正門は新約聖書マタイによる福音書7章13～14節「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」から名づけられたもので、「狭

き門」と呼ばれています。

今年、酪農学園は開校80周年を迎えました。「命」に関わる学問を通して社会貢献ができる人材を育成するために、「狭き門」を選んで歩み続けています。みなさんも「命」に関わる働きという「狭き門」を、今から神を愛し、人を愛し、土を愛す「三愛精神」と「健土健民」に基にした「建学精神」と「実学教育」を通して学んで行くことでしょう。皆さんの新たな歩みの上に神様の導きと恵みを祈ります。（編集子）

酪農学園大学キリスト教教育委員会

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地 黒澤記念講堂事務室

Tel. & Fax. 011-388-4775 (直通)